



“真の”グローバル人材とは- 日本の若者と会計士の 新たな未来を切り拓く

一般社団法人 全会連 代表理事 / 株式会社アオイエ取締役CFO
山本 健太郎 Kentaro YAMAMOTO



2014年に公認会計士試験合格。大学3年時より大手資格学校の会計士講座講師となる。その後、若手会計士と会計士受験生からなる団体、全会連を設立。現在は一般社団法人化し、代表理事を務める。また、2016年よりボランティアで学生起業家の創業支援業をはじめ、2017年よりその支援先の一つであった株式会社アオイエに入社、2018年より同社取締役CFOを務める。

大学在学中に会計士試験に合格したものの、あえて監査法人への進路を選ばず、次世代の教育と会計士を目指す学生支援に従事。独自の生き方をしながら、真のグローバル人材とその役割を模索する山本さんに、全会連と、そしてご自身の壮大なビジョンについてお聞きした。

コンセプトは 「想像から創造へ」

「会計士を目指したきっかけから教えてください。」

父親が国際協力機構(JICA)に勤務していた関係で、小学生のときに数年間、ロンドンに住んでいました。当時から、“将来的には海外で働きたい”という思いがありました。父が、英語が堪能な人だったので、自分にもできないわけがないだろうと思って大学に入りましたが、周囲には流ちょうに英語を駆使できる人がたくさんいて、今の時代、語学だけで勝負するのは難しいだろうと思いました。そこでもうひとつ、プラスアルファの武器があれば希少性が高まって、海外で働くという夢が実現できるのではないだろうかと考えました。

商学部在籍していたので、先輩や同級生から、こんな資格があるよと紹介を受けて、たまたま目の前にあったのが公認会計士の資格でした。その当時は、会計士が

どんな仕事なのかもわかってはいませんでしたが、なんとなくビジネスに関係する資格っぽいと思って勉強をはじめました。

「全会連」を設立されたのは、どのようなきっかけからだったのでしょうか。

大学2年生になって、会計士を目指す学生たちが集まるサークルの代表をやることになりました。その流れで、大学の代表として他の大学にある会計サークルとの合同イベントを企画したり、ゼミの代表や卒業生の集まりの幹事などの役割をするようになりました。徐々にノウハウが貯まっていったら、大学4年の時に、現在の「全会連」を設立することになりました。

設立趣旨は、会計士受験生のドロップアウトを防ぐというものです。自分は周囲に同じく会計士の勉強をしている仲間が多くいたので、彼らと情報交換をしたり、刺激があったりして、ライバル仲間みたいな感じで一緒に勉強する文化ができあがっていたのですが、他大学の話を聞くと、受験生の友達が一人もいないとか、予備校に行っても誰とも話さずに帰るのが当たり前だとか、そんな話を聞いて“それってモチベーション下がらないのかな？ 何とかならないのか？”と考えるようになりました。

私が以前、講師をしていた大手資格学校でも、最初に入会した学生のうち60%ほどは、短答を受ける前に受験勉強をやめてしまうという時がありました。もちろ

ん辞めていく人の中には、会計士以外の次の目標を見つけていった人もいますが、本当は続けたいのに、これ以上孤独に耐えられなかったり、頼れる環境がなくて辛かったりで辞めるという人も多くいました。そういったドロップアウトしてしまう人を減らす一つの方法として考えついたのが、受験生のコミュニティでした。会計士という同じ目標を持った同世代の仲間がいることで、時に励まし合い、時に高め合いながら受験生活を送ることができるのではないかと考えました。そしてそれが受験生だけの横のつながりだけでなく、すでに合格した先輩会計士ともつなげることで、受験生が憧れたり、目標とする先輩を見つれたりできると思いました。

この受験生のドロップアウトを防ぐという団体趣旨は、当然、現在でも残っていますが、私たちにはそれと同様に大切にしている理念があります。それは、「想像から創造へ」というコンセプトです。業界内を見ていると、例えば愚痴や文句だけを言って終わるような飲み会って結構多くて、そういうのって少しダサいって思うのですよね。そうではなく、もっと建設的な話をしたいなと…しかも、口で言っているだけでなく、実際に行動に移して、それをしっかり形にしていって行くまでやれれば理想系です。

なので、例えば去年あった話だと、全会連メンバーの飲み会の場で“会計士資格を取得したばかりの若手には、海外に行くチャンスってなかなかないよね”という

話があがりました。私たちはそれを、単なる愚痴としては終わらせません。その場にいるみんなで「じゃあ、いったいどうしたらいい？」という話が始まって、「全会連で学生合格者向けの海外インターンプログラムを作ったらどうか？」という提案が出ました。そこで、すぐに海外で働く先輩に電話して、「こう言っている学生がいるけれども」というところから、その先輩の働いている海外ファームの責任者の方につないでもらって、実際に学生の会計士試験合格者が海外の会計事務所1カ月インターンするプログラムを実現しました。

このように、全会連では、定例ミーティングや飲み会の場で、メンバーに自分の夢や、やりたいことをどんどん語ってもらっています。そして、それをみんなでブラッシュアップして、実現に持っていきます。また一方で、幹部メンバーの役割は、若い世代がやりたいと言いついたことに対して、自分の持っているものをできるだけ提供しています。しかも「チャレンジして失敗したら僕たちが責任取るから、好きなことをしていいよ」と自信を持って語るこそ、リーダーとしての責任だと感じています。これまでも、学生たちの発案によって地方の受験生向けイベントを企画したり、AI専門の学生団体と提携してイベントを実施したりしました。とにかく企画者がアツク語って他のメンバーに熱意が響いたら、あれよあれよという間に決まってしまう、そんな文化があります。

やはり、僕が全会連を通して一番実現したい世界観というのは、「皆が恥ずかしくらず、自分のやりたいことや夢、ビジョンを語りあえる世界」というものなのだと思います。

自分が考えたことを ゼロイチで作っていく

—山本さんは、専門学校の講師をしなが
ら、全会連の活動を行ってききましたが、
そもそも公認会計士の資格保持者とし



ては異色の経歴とも言えますね。あえて就職先に監査法人を選ばなかったのはなぜですか？

一言で言えば、あまのじゃくみたいなものなのです(笑)。私は21才の時に会計士試験に受かったのですが、当時の合格者の平均年齢は26歳ぐらいで、就職も売り手市場な時期でした。なので、なんとなく後5年は好きなことや、やりたいことをやって、26才になったとき、もう一回、監査法人で新人からやり直してもいいんじゃないかと思っていました。そんな時、尊敬する先輩講師の方に「講師やってみないか」と言われ、二つ返事でお引き受けしました。

会計士というセーフティネットがあったから失敗してもなんとかなる!と思い、どんどんチャレンジができた、という面は大きいと思います。

監査法人にすぐに行かなかったもう一つの理由は、合格当時、「監査法人に行つて何を学びたいか」という問に対する明確な答えが見えていなかったからです。監査法人に行くと決めた場合、少なくとも平日の日中の時間は監査法人業務に時間をとられて他のことができなくなる訳ですから、監査法人に行つて何がしたいか、何を学びたいかが明確でないと、周りに流されて終わってしまうな...と感じていました。

—現在は、全会連の代表以外に、どのようなお立場で、どのような仕事を進めているのですか？

合格してから4年間ほど専門学校の講師をしていましたが、今はスタートアップ企業の取締役CFOをしています。自分の中で教育という分野は大好きで、やりがいもあり、生涯関わりたい分野なのですが、受講生さんが目標に向かって毎日頑張っている姿を見て、自分も、もう一度大きな目標に向かって夢中で頑張りたいと思うようになってしまい、実務の分野に飛び込みました。

そして実務の分野で、若い世代でも成果を出せそうなものはあるかな?と思い、探したところ、既存の監査やデューデリジェンス、アドバイザーでは、もう年齢や経験年数の差が如実に出て先輩方に勝てないから、誰もやってないことをやろうと思いました。そう考えて出た結論が創業初期の企業のCFOみたいなポジションでした。この分野って、なかなかお金にもならないのでやっている人が少ないんですよね。そこで2016年ごろから、私と同世代の仲間が起こした会社何社かに外部アドバイザーみたいな感じで関わりだしたのです。しかも全部無料で。現在、私が所属するアオイエも最初はそんな形でジョインして、業績が

上向いた時点で報酬をもらうようになりまして。ただ、この初めての報酬をもらうまでも、実は1年と11カ月かかりました。なのでそれまでは、一切報酬はもらえず、自分で交通費を払って仕事をしていました。なので、初めて報酬をもらった時は、大学生で初めてアルバイトをして給料もらった時以上に感動したものでした。

—そういった創業初期の会社に対して、会計のバックグラウンドを持っているとどのようなバリューが提供できるのでしょうか。

会計士って、何でもできるようで、実は何もできないとわかりました。最初は、それこそ意気揚々と入っていったんですよ、会計とかのアドバイスしてやるぜ!みたいな感じで。ところが、確かに仕訳とか、決算書について聞かれたら答えられるのですが、そんなことって会社では大して問題にならなくて、最初にきた相談が会社の定款をつくる話とかだったんです…。

会計士と言うと、相手から「難しい話は何んでも知っている」と思われることも多いです。でも、税務の相談をされても十分期待に応えることができないし、労務もよくわからない。試験勉強の中で少しだけかじった企業法の範囲でしか答えることができなし、知らないことがたくさんあるのですよ。何でもできると思って入ったら、何もできないという現実がありました。

その一方で、逆に言えば、何でもできるとしてもらえるのは価値だとも思うのです。仕事はたくさん振ってくれますから、スタート段階で他の人よりアドバンテージが持っているのは会計士の強みかなと思います。

そういった形でとりあえず入って行って、例えば今いるアオイエでは会計、税務、法務、労務などの守りのバックオフィスと資本政策や事業戦略策定などの攻めの業務の両方をしています。こういった幅広い業務を担当させてもらえるのは、会計士の強みだと思います。会計士であるというだけで良いチャンスが自分の目の前を通る率は他の職業より高いです。もちろん、そ

のチャンスをもものにできるかはその人次第ですが、専門外だから、とか、まだ自分には早いとか言って断ってばかりいるとチャンスが巡ってくる機会はすぐに減ってしまうように思います。

「インターナショナル」ではなく「グローバル」

—もともと、海外で仕事をしたいという思いがあった山本さんですが、海外の会計士資格には興味はなかったのですか。

当時、U.S.CPAみたいな資格の存在を知らなかったというのが正直なところですが、だからといって存在を知った今、それを取ろうとも思ってはいません。例えば、海外の大学に留学して、そこで会計学を専攻して、海外の事務所に入ってU.S.CPAを取得。そのまま海外で活躍する流れって、結構ライバルがいると思うのです。

自分のやり方として、「人がやらないことをやる」というこだわりがあって、自分を最初からオンリーワンという状態にしておいて、そのまま上がっていくほうが良いと考えています。要するにライバルが多い状

態が嫌なんです。比べられたくない、放っておいてほしいタイプ。会計士でありながら、あまり一般的ではない、よくわからない道を突き進んでいって、その後グローバルな道に行ったら、それはかなりレアな存在になります。今、私の中ではグローバル人材の再定義というのが大きなテーマになっているので、そこら辺を固めてから海外に行っても遅くはないと思っています。

—山本さんが考える“グローバル人材の定義”ってどのようなものでしょう。

日本においては、「国際」というひとつの言葉しかないのですが、英語では「インターナショナル」と「グローバル」という二つの表現があり、この二つはそもそも語源が違います。「インターナショナル」は、ナショナルのインターなので、国と国の間でどうなるのかという話。例えば日米とか米露とか、そういった捉え方になるのですが、「グローバル」の語源は「グローブ=地球」なので、地球全体でどう考える?という話となり、両者は似て非なる言葉なのです。

これを会計士に当てはめて考えると、日本の会計士が海外の会計事務所では何年か働くとか、IFRSに詳しくなって日本企業の海外進出の手助けをするというのは、国の



壁を越えて、言語の壁を越えて仕事をするという形なので、インターナショナルよりの発想だと思っています。

一方、私が考える真のグローバル人材とは、貧困とか環境問題とか、一国ではなく、「地球全体で」考えていかななくてはいけない問題の解決に寄与できる人材のことだと思っています。

現在、私が思い描いているのが、2015年の9月に国連サミットで採択されたSDGs (Sustainable Development Goals) のように、世界規模で解決しなくてはならない課題に対して、会計士の立場で役に立てないかという話です。地球全体で考えることができる人材って、まだこの業界には少ないのではないかと感じています。

SDGsには貧困や教育、飢餓、ジェンダー平等など17の課題があって、“その分野×会計士”で解決できるものはないだろうか？例えば、監査という文脈でいえば、人権を無視していたり、環境を破壊している企業に対しては、監査報告書で適正意見を出さないとか、追記情報でそれらのことにも言及するとか。それは会計士だけでなく、法律家や社労士など他のプロフェッションとのコラボレーションの中で、新しい監査基準を作るなどの大きな枠組みの中で、地球規模の課題の解決に寄与できないものかと模索しています。一見、突拍子のないような話に思えるかもしれませんが、私の中では徐々に段階を踏んで、しっかりと実現に近づけていくつもりです。

一ものすごく大きなビジョンですね。それを実現するには、今後、どのようなキャリアを積んでいかれるつもりですか？

今はまだ、日本国内でやりたいことが多くあって、例えば2年間、留学して日本を離れる口は大きいと思っています。なのでしばらくは日本の中で活動を続けていきたいですね。ただ、一方で海外での最先端の議論や、海外の同世代が何を考えているかについては、しっかり触れておきたいので、可能であれば年に一度は国際会議とかに参加して、そういった話に触れておきたいと思っています。そして、20代のうち

に日本でできること、そしてどの分野で、どう勝負するかの方角性を見定め、30代になったらグローバルな舞台で勝負をかけたと思っています。

—今後の全会連は？

私達が、「想像から創造へ」という理念の先に見据えているのは、「私たちが10年後、20年後の未来を創っていく」というミッションです。自分たちがリーダーとなる世代になったときに何をすべきかということ、今の段階からしっかり見据えておこうと思っています。

この全会連も、いよいよ4期目に突入しました。若手を中心に、皆が夢を語り、ベテランがその実現をサポートするという全会連の文化を徐々に広めていきたいと思っています。

自分の中では、とにかく「皆が自分の夢ややりたいことを自信を持って語り、それに向かってチャレンジできる世界を創りたい」という想いが大きいです。その中で、それぞれが具体的に何をやるかはその人自身が考えていけばいい。人脈とかネットワークとか、そういうダサい、旧態依然としたものではなく、ユニークで生き活きとした魅力的な会計士が、夢を語り合っただけで刺激を受けあえるような、「弱いつながり」の場を全会連を通して創っていきたいです。

このインタビューは2018年5月1日に実施されました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>